

モンスターハンバァァァァグ！！

オンドウルの破壊者恋さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハンバーグ師匠見てたら描きたくなつた。活躍させてみたくなつた。

モンスターハンター要素は基本モンスターだけだと思つて下さい。

ちなみに作者は一応MH4、MH4G、MHXはプレイ。そのうちクリアしたのはMH4のみです。

駄文だからそこんところはご了承して下さい。

目次

出会い編

ハンバーグ師匠が此処に見参

1

ハンバーグ師匠と友達？

4

出会い編

ハンバーグ師匠が此処に見参

俺の名はダン。そこらへんにいる新米ハンターだ。そして今俺が何しているかというと

「たあすけてええええええええ！」

モンスターに追われている。

「ハア…ハア…くそっ！何だっつてんだよ！こ→こ←こんな凶悪なモンスターいないはずだろ!？」

あわてて口が回らないのは気にしないで、追われているモンスターはあのクツク先生で有名なイヤンクツクだ。

いやいやそのブラウザバックしようとしている手を抑えてくださいよ！だっつてあいつ強いじゃん!?!昔どれだけやられた事か…（作者談）

「そんなことどうでもいいから！誰か助けてくれえええ！」

作者の話などを無視し再度助けを求めるダン。

「ぐわええ！」

前を見ず走っていた為石につまづいてしまつて絶体絶命！どうするダン!？

「この場所も変わらねえな…」

「!？」

ダンとイヤンクツクはその声がする方へ顔を向ける。なんだかここでは珍しい格好をした人物がいた。

「どうした？付け合わせのミックスベジタブルを見るような目で俺を見やがって」

「……………」

完全にイヤンクツクの標的が謎の人物に変わる。

「忘れちゃったか？俺だよ俺…」

「ハンバーグだよ!!」

「いや知らねーよ!」

なんだよ! あいつ! いきなり現れたと思いきや次は変な事を言い出す! あのクック先生でさえもキョトンとしているよ!

「:それでは早速腹ペコの皆様に熱々の鉄板ジヨーク100g? から」

そして何事も無かったように口開くなよ! それにジヨークっておま...

「この間ハンバーグの友達が彼女にフラれてね。目も当てられないくらい落ち込んだ」

「.....」

ああ: やばいよ: やばいよあのおっさん: 何考えているんだ: 完全にクック先生に殺意向けられてるじゃん:

「かける言葉がなかったよ」

「かけてやりなよ」

「デミグラス」

「キエエエエ!」

あ、終わったなおっさん。そう思っていた時期が俺にはありました。

デエエエエエエエン!

な、なんだ!?! いきなりおっさんから変な効果音が!

「ハンバァァァァァァァグ!」

「はっ」

今起こった事をありのまま話すぜ: あいつがハンバーグと叫ぶとクック先生が: 一撃でノックダウンしやがった:

「ええええええ!?! んなバカな: ! えっええええ!?!」

「少年よ。すまないが村まで案内してくれないか」
「え？あ、あ、分かりました…」

自分でもよく落ち着いて言えたなと思ったがそれしか言えなかった。

道中にて

「実はねハンバーグ。これでも昔少年と同じハンターをしていた時があっただよ」

それがどうしてこうなったんだよ…

「何故かって顔してるな。それは俺がハンバーグだからだ」
は？

「俺がハンバーグでいるから。それが定めだったという事さ」

益々意味が分からん…

謎が深まったまま村に着いた。ちやつかりクツク先生の素材を持ち帰って。

次回予告

「この町も変わらねえな…」

「来たことあるのかよ！」

「お、お前は！」

「俺は筋肉料理愛好家。マグマ中山」

次回「ハンバーグ師匠と友達？」

更新日は未定！

ハンバーグ師匠と友達？

「ここは名もなき村。それ以上でもそれ以下でもない。」

「この村も変わらねえな…」

「来たことあんのかよ！」

「どうやら昔来たことがあるようだ。」

「おお、お前さん。久しぶりじゃな…」

「村長！知り合いだったんですか？」

村長が来てそう言う。

「ああ此奴は昔この村の専属ハンターじゃった。とても強くてのう」

「よせよ。じーさん昔の話だ」

「でもいきなり「俺は最高のハンバーグになる！」といつてこの村を出て行ったんじゃ」

全く意味が分かんねえよ！そう聞きたかったが村長に止められた

「やめい！面倒くさくなるじゃろ！」ヒソヒソ

本当どうしてこんなおっさんが強いのか…謎が深まるばかりである。

—————

ダンが自分の家で次の狩りの準備をしていると、

アハハハハ！！

外で多数の子供の笑い声が聞こえた。少し外に出て見ると、

「こないだね。トンカツとメンチカツとハンバーグで芝居をやったんだ」

ネタを披露しておらっしやる…やっぱお前ただの漫談師だろ！

「けどトンカツとメンチカツだけとても緊張してたんだ。何故だと思っう？」

ネタを披露している所から俺が見ている場所はかなり遠いが子供達の笑い声が此処まで聴こえる。しかもずっと絶えずにだ。

「ハンバーグだけ上がってないからね」ドヤア

「アハハ！！」「何コレー！」「おもしろーい！」

デエエエエエエエ！！

お、この変なBGMが聞こえたという事はあれが出るのか、絶対子供受けがいいだろうと思いい見ていたが、

「ハンバアアアアグ!!」

シーン

子供達が一斉に真顔になり全く笑わなくなった。それに耐えられなくなったのかハンバーク師匠は

「ハンバアアアアグ!!」スタスター

「帰んなああ!」

逃げる様に近くのお店に入って行った。

とか子供達の笑いの基準…なんで上がってないからねというわかりづらい洒落で笑い、単純なネタで笑わないのだろうか…こっちの方が謎である。

—————

ハンバーク師匠が俺と一緒にクエストについていくことになった。村長からの命令だ。絶対厄介払いしろ!

「少年。いやダン君といったね。どのクエストに行くんだい?ハンバークはね、このクエストなんかいいと思うが」

そう言っ差し出してきたのは

【イビルジョー討伐】

「論外だ!」

などの話を繰り返していると、後ろから足音が聞こえる。ハンバーク師匠もそれに気づき後ろを見ると海パンとピンクの帽子をかぶった筋肉ムキムキな男がいた。

「お前は!」

何やらファンキーなBGMを流しながら筋肉ポーズをしながら段々と近づいて来る。

「久しぶりだな。ハンバーク。君は初めてだな。俺の名は筋肉料理研究家。マグマ中山だ」

まーた変なのが出てきた…

「中山…何しにここに来た」

「全てはお前との決着をつけるためだ!」

決着!?!こんな村の真ん中でそんなことやられたら…

「分かった。いいだろう」

おい!ハンバーグ!こんな所で騒ぎ起こすんじゃないじゃねえ!

「覚悟!」

うわあー!

思わずぎゅつと目を瞑る。数秒後何も起こらないと思い目を開けると、

ガラガラ

「へ?」

覚悟!そう言いマグマ中山が何処からともなくテーブルとその上にスパゲッティを用意する。

「まずはハンバーグ。お前からだ!」

「分かった。んっん」

どうやらハンバーグから始める様だ。

「じゃさつと終わらせるのでフライングハンバーグをここで1つ」

「こないだね。ハンバーグ喫茶店に「ハンバアアアアアグ!!」

瞬間ハンバーグの後ろから突風が吹く。

「くっ!中々やるな!」

いやなんも笑えねえよ!

「だがそんな短くていいのか?」

「いいんだよ。次はお前の番だ!」

「ああ。んっん」

分かるよ。ちゃんと声だけは大切にしないと。やはり漫才師にとって声は命。だけどこれだけはやめよう。村の真ん中で奇声を放つ男と筋肉ムキムキの怪しい男。俺までが関係じゃに見られてしまう。

「まずは皆さん。普通のスパゲッティを用意してください」

「このままだったら普通のスパゲッティ。皆さん粉チーズを用意してください。ここからがマグマなんです!」

「ミュージックスタート!」

先程近づいてきたときのBGMと筋肉ポーズをし粉チーズを持ち

ながらも披露している。

対するハンバーグはそれを見て構えている。

お？どうやらBGMが止まる様だ。

♪♪♪

「だーーーーー！」

どうだ！とマグマ中山はハンバーグを見る。いやあんただだスパゲッティに粉チーズかけたただけだろ！

バキュン！

ハンバーグからそう聞こえる。それと同時にハンバーグが倒れる。ここにいるマグマ中山、俺も驚く。いきなり聞こえるからだ。

「へっ！またこいつに助けられちゃったぜ！」

そう言っ取り出したのはハンバーグだった。

「いやおかしすぎるだろ！なんでハンバーグで銃弾が?! いやそもそも銃なんか誰も…」

「くっ！完敗だ！」

「えええ!?!」

「どうだ。中山。俺の二段構えは」

「完璧だ…！くそ！クソおオオオオオオ！」

「こんな茶番もういいよ！」

—————

あの後なんとか収集が付き、やっと狩りへ出発することになった。

「やっと出発できる…」

「そうだな少年」

「」

「ハンバーグ。少し回復薬をくれないか？」

「分かった。いいだろう」

ダッ！

「おい！待て！待つんだ！少年！慌てなくてもモンスターはいるぞ！」

そういうことじゃねえよ！

後はご想像にお任せします。

――――
次回予告

「行くぞ！ハンバーグ！」

「ああ！中山あ！」

「フアツ!？」

「お、お前は！」

「チキショー!!」

次回「ハンバーグ師匠&マグマ中山の狩猟／ハンバーグ師匠の友達
…ってもういいわ！」